

難聴通級指導教室通級児の 聴覚活用及びコミュニケーションにおける困難の様相に関する調査

—— SR（復唱）課題による検討 ——

鈴木 友里恵*¹・濱田 豊彦*²

支援方法学分野

(2017年9月26日受理)

1. はじめに

中等度及び高度難聴児では、早期発見、補聴器適合及び聴覚学習の重要性は、十分に認識されている。その一方で、軽度・軽中等度難聴児（以下、軽中度難聴児）に関しては、早期発見が難しいだけでなく、診断後も日常会話の聴取には支障がないと考えられることが少なくなく、単なる聴力検査のみで経過観察されることが多い。しかし、日常会話音圧における会話聴取は必ずしも良好ではないといわれている（塚田ら、1998）。

また、人工内耳装用児は、聴覚補償のフィードバックの結果として聴取弁別能が向上するとともに、発声発語面においても大きな改善がみられる。発音がある程度明瞭になり、1対1の対話場面ではコミュニケーションが容易であることで、親も周囲の者も満足し、聴覚障害児に対する意識的関わりが希薄になりがちであることも多い。しかし実際には、聴児に比べると人工内耳装用児の語彙検査の結果は劣っており、表出語の長さも短く、文型も簡単なものが多かったことが報告されている（井脇、2006）。

つまり、比較的聴覚活用がしやすいと考えられている軽中度難聴児や人工内耳装用児でも、実際の会話聴取能力や言語発達面、コミュニケーション面には課題がみられるということである。

しかし、上記のような聴覚障害児の困難を簡便に数量化し、具体の指導につなげるような指標はないのが現状である。

2. 目的

比較的聴覚活用がしやすいと考えられる軽中度難聴児や人工内耳装用児等（以下、聴覚障害児）を対象に、聴覚活用の程度及びコミュニケーションにおける困難の様相を明らかにし、彼らの聴覚活用の程度を測る尺度を試案しその効果を検証することを目的とする。

3. 方法

3. 1 対象

都内の難聴通級指導教室に通う小学1～6年生の児童17名を対象とした。表1に、対象児の学年、補聴手段、良聴耳の平均聴力レベルと装用時間値、語音弁別能、教研式Reading-Testの読書力評定を示した。

また対照群として、聴力に障害のない小学生30名（2, 4, 6年生）にも調査を実施した。

3. 2 課題

3. 2. 1 本課題

今回の調査では、SR；Sentence Repetition（復唱）の方法を用いた。Sunada（2014）によると、SRは第一言語の発達を観察する調査で用いられてきた歴史があり、言語力を受容・産出の両面から明らかにできるものである。さらに、獲得されている暗示的な文法知識についても測定できるといわれている。そのため、聴覚障害児を対象とした言語・コミュニケーション面の

*1 東京学芸大学大学院 教育学研究科

*2 東京学芸大学 特別支援科学講座 支援方法学分野（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

表1 対象聴覚障害児プロフィール

児童	学年	補聴手段	平均聴力レベル (dBHL)	平均装用時間値 (dB SPL)	語音弁別能 (%)	読書力 評定
A	6	HA	25	18.8	95	1
B	6	HA	40	20	95	5
C	6	HA	33.8	31.3	95	4
D	4	CI	96.3	30	90	3
E	3	CI	109	36.3	85	2
F	1	CI	111	36.3	70	不明
G	4	CI	128	30	100	4
H	3	HA	50	23.8	100	3
I	5	HA	61.3	36.3	100	3
J	3	HA	67.5	37.5	85	4
K	5	HA	95	30	85	5
L	4	CI	129	30	70	4
M	4	CI	不明	36.3	60	3
N	5	CI	116	25	100	5
O	5	HA	46.3	26.3	100	3
P	6	CI	98.8	25	90	4
Q	6	HA	45	25	95	2

課題を調べる尺度として活用できる可能性があると考え、今回の調査に用いた。

調査では、SRの課題を全12問実施した。課題文は、『現代日本語文法』（日本語記述文法研究会、2010）シリーズを参考に、文構造の変化を指標として作成した。具体的には、①主語に形容詞がかかるもの、②目的語に形容詞がかかるもの、③述語に文法カテゴリー（ヴォイス：受身／使役、アスペクト：～（テ）イル形、肯否、テンス：時制、認識のモダリティ：「～ようだ」等、伝達のモダリティ：丁寧さ（ですます等）／伝達態度（「～（です）よ」等）を付加したもの、④主格にかかる複文、⑤目的格にかかる複文、といっ

た文構造を用いた。①②③は単文で、④⑤は節を2つまたは3つ含む複文である。以上のように文構造を変化させ、課題文の複雑化を図った。課題文一覧は表2に示した。

なお、課題文では、『新・教育基本語彙』（阪本、1984）において学習段階が「小学校低学年」とされている語のみを用いている。

聴児・聴覚障害児とともに、児童自身が聴きやすいと判断した音量で、課題文をスピーカー（SONY h.ear go SRS-HG1）で再生した。指向性マイクロホン（SONY ECM-MS957）に向けて課題文を復唱させ、レコーダー（SONY PCM-D50）に録音した。

表2 SR課題文 及び 文構造 一覧

	課題文	文構造
1	弟は牛乳を飲んでます	③
2	大きな青い新しいバスが停まっています	①③
3	弟は兄に掃除させられている	③
4	兄は古い難しい厚い本を読んでいます	②③
5	息子はおじさんに叱られていなかったようです	③
6	おばあさんが作った梅干しはすっぱいです	④（2節）
7	妹は友達に掃除させられていなかったらしいですよ	③
8	人形を持った子供が写っている写真が落ちてます	④（3節）
9	猿が道に落ちている柿を拾いました	⑤（2節）
10	妹は母が作ったケーキが好きです	⑤（2節）
11	私は母が父の釣った魚を焼くのを手伝いました	⑤（3節）
12	私は弟が庭に生えているひまわりに水をやっているのを見ました	⑤（3節）

児童が課題文を言い淀むことなく完全に復唱できたものを「完全正答」、言い淀みや言い間違いはあったものの主体的な言い直し等によって課題文と同じ表現で復唱できたものを「不完全正答」、文意が同じか異なるかに関わらず、課題文とは違う表現で復唱しているものを「不正答」とした。

3. 2. 2 ワーキングメモリの測定

課題文においては、前項で述べたような複雑化を図ることで、文中の語数が増え文章自体が長くなる。すなわちSRの成績には、長い文章を記憶できるワーキングメモリの力が関わってくると考えられる。

しかし、各個人のSRの成績が、それぞれのワーキングメモリに影響を受けているのか、聴取能力や言語力に影響されているのかは判断できない。そこで、対象児のワーキングメモリとSR正答率との関係性を確認するため、補助課題としてWISC-IV「数唱」より、「順唱」を実施した。

聴児・聴覚障害児ともに、ノートパソコン(Panasonic CF-SZ5HDNKU)でPowerPointを用いて文字(数字)と音声と同時に提示した。数字及び音声は、WISC-IVの実施マニュアルに則り、1秒に1字の速さで提示した。また、音声は、児童自身が聴きやすいと判断した音量で、スピーカー(SONY hear go SRS-HG1)で再生した。児童は口頭または指文字で回答し、正しく記憶・再生した桁数で評価した。

3. 2. 3 語音聴取能の測定

SRには、ある程度の語音聴取力を必要とする。各個人のSRの成績と聴取能力との関係を確認するため

に、語音弁別検査67-S語表より、1表の20音を実施した。

口形を隠した状態で検査者が肉声で1表を読み上げ、児童自身が用紙に回答を記入した。聴覚障害児のみに実施した。結果は百分率で算出し聴取弁別能とした。

4. 結果

4. 1 各文の完全正答率

課題文を完全に復唱できた「完全正答」の割合を完全正答率とし、聴児・聴覚障害児それぞれの結果を算出した(図1)。

聴児群の平均完全正答率は50.0%、聴覚障害児群では28.4%だった。文10では聴児の完全正答率が83.3%、聴覚障害児88.2%、また文8では聴児10.0%、聴覚障害児11.8%で、聴覚障害児の完全正答率が聴児に比べ高くなる課題文もあった。しかし、その他10問ではすべて聴児のほうが高い結果となった。

また、文1, 5, 9では、聴児・聴覚障害児の完全正答率が40ポイント以上開いており、大きな差がみられた。

4. 2 各対象児の完全正答率と数唱結果

各対象児の完全正答率と、数唱で記憶できた桁数との相関を調べた。聴児では、 $r = 0.54$ ($p < .01$) となり、有意な相関関係がみられた(図2)。一方、聴覚障害児では、 $r = 0.20$ となり、相関はみられなかった(図3)。

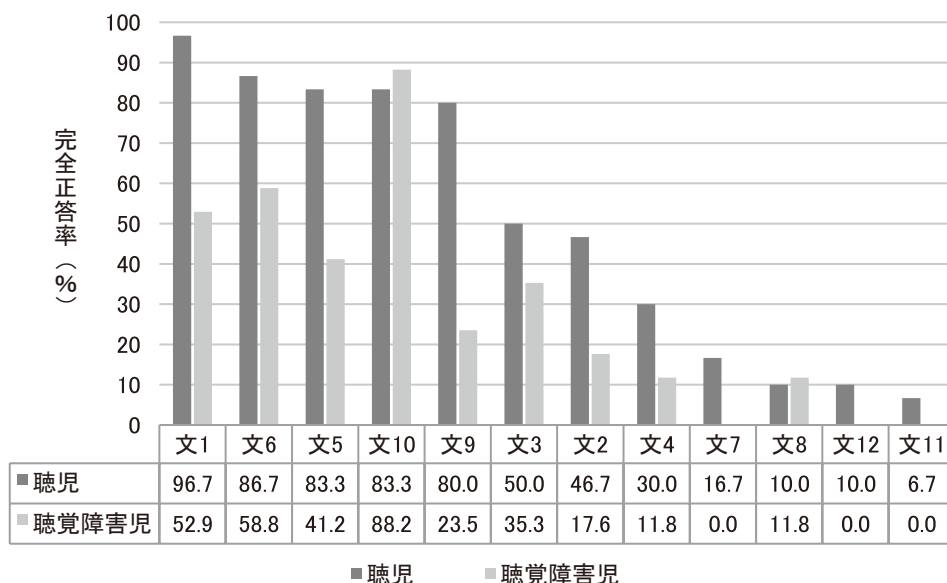


図1 文ごとの完全正答率(聴児・聴覚障害児)

4. 3 聴覚障害児の完全正答率と聴力

各聴覚障害児の完全正答率と、聴力との関係を調べた。良聴耳の平均聴力レベル及び平均装用時間閾値の2パターンで相関係数を求めた。

平均聴力レベルでは、 $r = -0.19$ 、平均装用時間閾値では、 $r = -0.42$ となった。どちらの場合も、相関はみられなかった (図4、図5)。

4. 4 聴覚障害児の完全正答率と語音弁別能の関係

各対象聴覚障害児の完全正答率と、語音弁別能との関係を調べた。その結果、 $r = 0.55$ ($p < .05$) となり、正の有意な相関関係がみられた (図6)。

一方で、語音弁別能はよいものの、完全正答率が低い者も見受けられた。語音弁別能と完全正答率との差を調べたところ、平均値から1SD以上離れ、差が

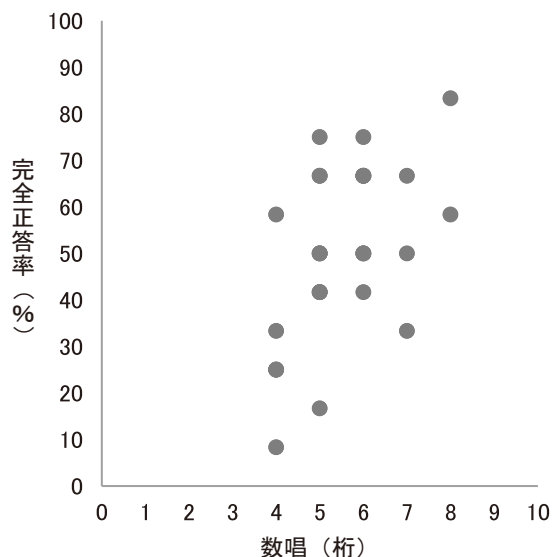


図2 数唱と完全正答率 (聴児)

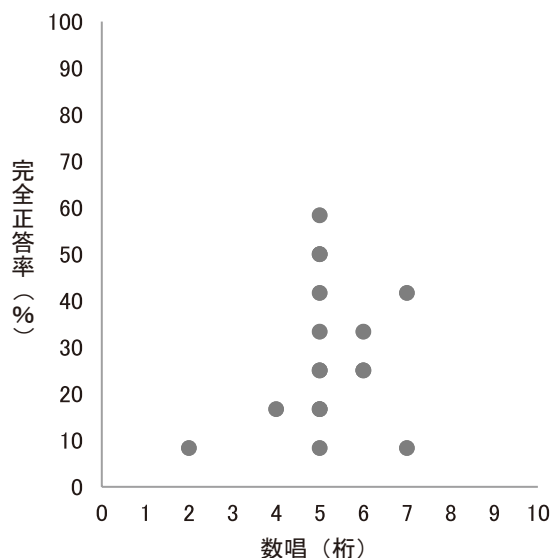


図3 数唱と完全正答率 (聴覚障害児)

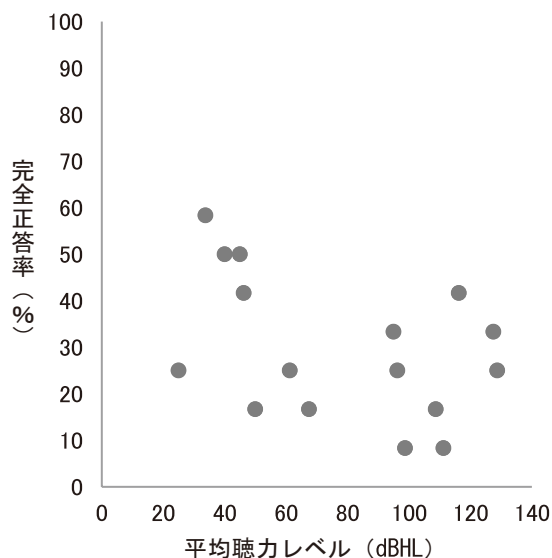


図4 平均聴力レベルと完全正答率

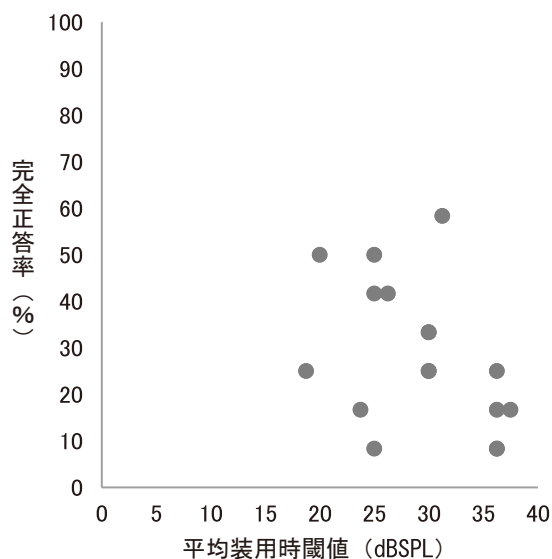


図5 平均装用時間閾値と完全正答率

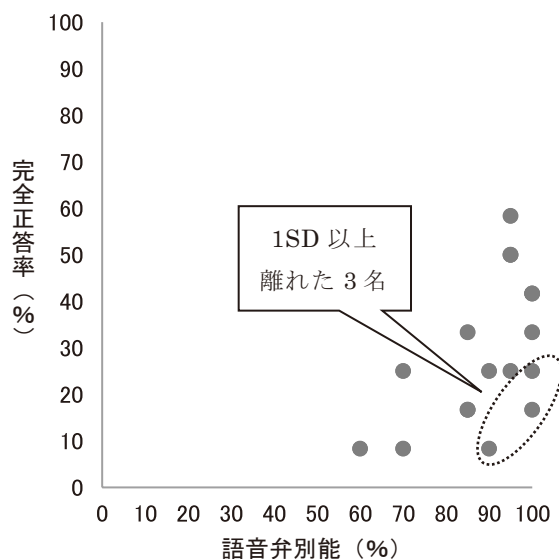


図6 語音弁別能と完全正答率

73.54ポイント以上（語音弁別能>完全正答率）開いている対象児が3名いることがわかった（平均60.26ポイント差，SD = 13.28）。この3名（H児，I児，P児。図6中に点線で囲って示した）は，語音弁別能と完全正答率の相関関係の分布から外れるものであるといえる。

その原因として，彼らの言語力が低いことが推測された。そこで，言語力を示す指標として教研式Reading-Testの読書力評定を採用し，その傾向を調べた。その結果，H児とI児の読書力評定は3点（普通程度），P児が4点（優れている）となっており，3名の読書力は学年相応またはそれ以上であり，今回の結果からは言語力による影響とは言えなかった。

4. 5 誤りパターンの比較

復唱の間違え方を“誤りパターン”とし，各文においてそれぞれ聴児・聴覚障害児の誤りの傾向を調べた。

誤りパターンは，大伴（2011）の「復唱の誤りのタイプと誤りの例」における分類及び表現を参考に，筆者が分類した（表3）。また，フィラーに関しては様々な定義があるが，中島（2009）におけるフィラーの定義「それを取り去っても伝達する文・談話の命題内容

に変化を及ぼさないもの」及び，小磯ら（2006）における「フィラーとは，言い淀み時などに出現する場繋ぎ的な表現のことである」という説明を参考に，筆者が「フィラー」として分類した。

図1に示した聴児の完全正答率のデータを基準に，各課題文の難易度を定めた。完全正答率が30%までに留まった文11，12，8，7の4つを「難解群」，30%～50%の文4，2，3の3つを「中間群」，80%以上の文9，10，5，6，1の5文を「平易群」とした（表4）。各群のなかで誤りパターンを足し合わせ，その出現率を調べた。

4. 5. 1 難解群の誤りパターン

まず難解群に関しては，聴児・聴覚障害児ともに〔無声休止〕が最も多くみられた（出現率：聴児16.7%，聴覚障害児5.0%）。以下，順位にずれはあるものの，〔無声休止〕を含む上位9種類は両者共通（〔言い直し〕，〔舌のもつれ〕，〔語・格等の削除（異義）〕，〔フィラー〕等）だった。しかし，現れた誤りパターンは36種類とばらつきがあり，上位9種類以外の誤りパターンには出現傾向の特徴もみられなかった（図7）。

表3 主な誤りパターンとその例

誤りパターン	定義と例
〔要素の削除〕	語や格，文法カテゴリー等を削除（原文と同義か異義か） 〔要素の削除〕 原文「大きな <u>青い</u> 新しいバス」→「大きな新しいバス」と復唱（異義）
〔要素の付加〕	語や格，文法カテゴリー等を付加（原文と同義か異義か） 〔助詞の付加〕 原文「掃除させられて」→「掃除をさせられて」と復唱（同義）
〔要素の置換〕	語や格，文法カテゴリー等を置換（原文と同義か異義か） 〔助詞の置換〕 原文「弟は牛乳を」→「弟が牛乳を」と復唱（同義）
〔有声休止〕	音声を引き延ばす 「弟は <u>あ</u> ～牛乳を飲んでます」
〔無声休止〕	音声が途切れ，無音区間が生じる 「弟は…牛乳を飲んでます」
〔フィラー〕	場繋ぎ表現を付加 「えっと」「ん？」「あー」など
〔舌のもつれ〕	舌がもつれ，所謂“囁んだ”状態 子音のみ発声している場合等も含む 「掃除さ <u>さ</u> えられて（させられて） 「ふ <u>い</u> （ふ <u>る</u> い；古い）」
〔言い直し〕	誤りを自ら正し，言い直す 「弟が <u>じ</u> ゆ，弟が <u>ぎ</u> ゆうに <u>ゆ</u> うを」
〔DK〕	児童から「わからない」「もう一回聴きたい」等と申告があったもの

表4 文の難易度一覧

No.	課題文	聴児の完全正答率 (%)	難易度
11	私は母が父の釣った魚を焼くのを手伝いました	6.7	難
12	私は弟が庭に生えているひまわりに水をやっているのを見ました	10.0	難
8	人形を持った子供が写っている写真が落ちています	10.0	難
7	妹は友達に掃除させられていなかったらしいですよ	16.7	難
4	兄は古い難しい厚い本を読んでいます	30.0	中
2	大きな青い新しいバスが停まっています	46.7	中
3	弟は兄に掃除させられている	50.0	中
9	猿が道に落ちている柿を拾いました	80.0	易
5	息子はおじさんに叱られていなかったようです	83.3	易
10	妹は母が作ったケーキが好きです	83.3	易
6	おばあさんが作った梅干しはすっぱいです	86.7	易
1	弟は牛乳を飲んでいきます	96.7	易

4. 5. 2 中間群の誤りパターン

中間群の誤りパターンについては、出現率が最も高かったものは聴児で「言い直し」(22.4%)、聴覚障害児で「語・格等の削除(異義)」と「有声休止」(同率16.7%)であった。誤りパターンは両者合計で22種類あった(図8)。

4. 5. 3 平易群の誤りパターン

平易群では、聴児・聴覚障害児ともに、「舌のもつれ」が最も多くみられた(出現率:聴児33.3%,聴覚障害児16.7%)。聴児では誤りパターンは以下「言い直し」,「有声休止」,「名詞の置換(異義)」等の9種類のみであった。一方、聴覚障害児の誤りパターンは全19種類あり、難解群・中間群と比べれば少ないも

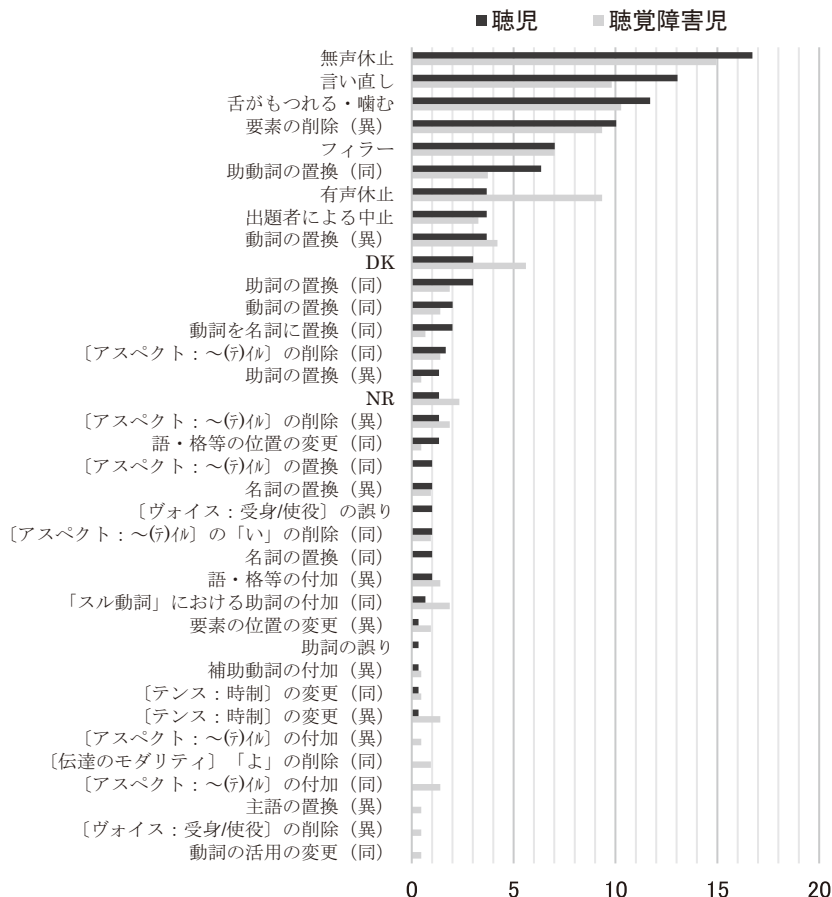


図7 「難解群」における誤りパターンの比率 (%)

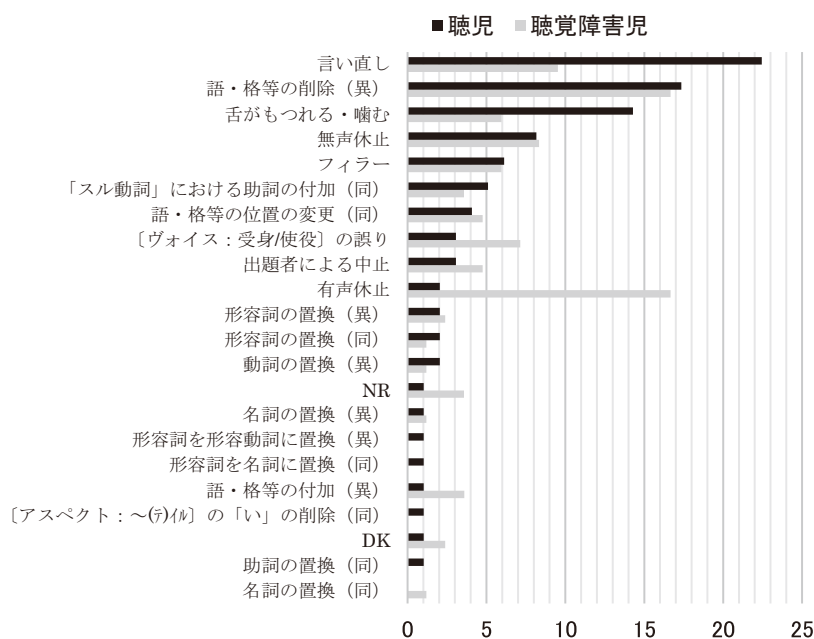


図8 「中間群」における誤りパターンの比率 (%)

の、多数の誤りがみられた。また、聴覚障害児の誤りパターン19種類のうち、元の文の意味と異なる意味を表すものが10種類あった。同様に聴児では、9種類中2種類であった(図9)。

4. 5. 4 聴児と聴覚障害児の完全正答率のギャップから見た誤りパターン

4. 1で示したように、文1, 5, 9では、聴児・聴覚障害児の完全正答率が40ポイント以上開いている(聴児>聴覚障害児)。文1, 5, 9において、聴覚障害児は復唱の際どの部分でつまづいているのか、その特徴を以下に示す。

まず、完全正答率に56.5ポイントの差があった文9

では、誤りパターンのうち、〔言い直し〕と〔DK〕が特に多くみられた。

続いて、完全正答率の差が43.7ポイントだった文1では、〔フィラー〕と〔助詞の置換(同義)〕の誤りパターンが特に多くみられた。〔フィラー〕は、復唱開始前(最初の発声がフィラー)、及び復唱開始直後にみられた。〔助詞の置換〕についても、「弟は」の「は」を置換しており、こちらも復唱開始直後の誤りである。

最後に、完全正答率の差が42.2ポイントだった文5では、〔無声休止〕、〔有声休止〕の誤りパターンが特に多くみられた。どちらの休止も、語を発しながらも、その語を言い切る前に迷うようなパターン(「叱

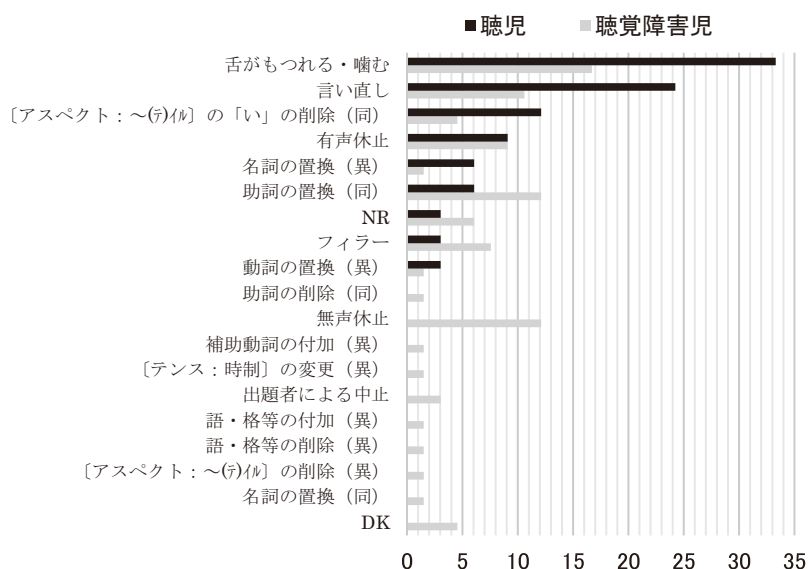


図9 「平易群」における誤りパターンの比率 (%)

られ」を「叱…られ」と言うなど)が多かった。

5. 考察

5. 1 各対象児の完全正答率と数唱結果の相関から

聴児は完全正答率と数唱の結果、すなわちワーキングメモリとの相関がみられたのに対し、聴覚障害児では相関がみられなかった。記憶の力がSRの成績に反映されているのに対し、聴覚障害児の場合は記憶の力以外の要因が関係していることが考えられる。SRの課題文においては、文構造に変化を持たせることで、同時に量的変化を生じさせているものも多い。しかしそのことは単に被験者である聴覚障害児の記憶面に負荷をかけたというだけでなく、文構造の複雑さにより聴き取りや言語処理の面にまで負荷を与えられたということが推測される。従って、SRの成績は、聴力や記憶力以外の要因を含んだ結果である可能性が示唆された。

5. 2 聴覚障害児の完全正答率と聴力レベルの相関から

聴覚障害児の聴力レベルは、SRの成績に必ずしも影響を与えないことが示唆された。このことから、5. 1の考察と同様に、SRが単純に聴力だけでなく言語処理能力なども踏まえた聴取能力を測定できる新しい尺度となり得る可能性があるといえる。

5. 3 読書力評定とSR

4. 4の結果から、語音弁別能はよいものの完全正答率が低い者は、言語面に課題があることが考えられた。しかし、3名の読書力は学年相応またはそれ以上であることがわかった。このことから、Reading-Testの読書力評定がSRの成績の低さを説明するものとは考えにくい。言語力の指標として、読書力評定を用いることが妥当であるかどうかは、検討の必要がある。今後の課題としたい。

5. 4 誤りパターンからの考察

より複雑で高難度の文章においては、聴児・聴覚障害児の正答率に差はあったものの、誤りパターンに明らかな傾向の差はみられなかった。

中間群の文については、聴児に多い誤りは〔言い直し〕であり、これは完全正答ではないものの、意味的・文法的な面での問題はないといえる。しかし、聴覚障害児に多い誤りパターンは、〔有声休止〕と〔語・格等の削除(異義)〕であった。後者の誤りでは、

語・格等が削除された結果、復唱した文が元の文と意味的に異なってしまっている。そのため、この誤りパターンが高頻度で現れたことは、例えば言語処理に時間を要するなどの聴覚障害児のコミュニケーション上の困難を示唆するものであると考える。

最後に平易群では、聴覚障害児は誤りパターンの半分近くが「元の文とは異なる意味になる」誤りだった。比較的単純で平易な文でありながらも、このような誤りパターンが多数見受けられることは、例えば学校生活において、指示された内容の取り違えや、友人との会話がかみ合わないなどといった、聴覚障害児のコミュニケーション上の困難の一端を表しているといえる。

5. 5 聴児と聴覚障害児の完全正答率のギャップから見た誤りパターンに関する考察

文9と文10では同じ文構造であるにも関わらず、聴覚障害児の文9の完全正答率の低さは顕著である。この結果は、文章中の単語の親密度が背景にあるのではないかと考えられる。聴覚障害児の誤りパターンに〔DK〕が多いということからも、文中で使用されている語に馴染みが薄く、聴いてもイメージしにくいものであった可能性がある。今後、語連鎖における親密度なども考慮して課題文を作成する必要があると考えられる。

文1に関しては、他の問題文と比べても単純な文であるにも関わらず、復唱開始前のフィラーが多くなる傾向にあった。このことは、問題の形式に慣れていない状態では、不完全正答が多くなることを示唆している。つまり、SRを調査尺度として実施する際には、その誤りを安易に誤答とみなさないようにする配慮が必要であると考えられる。

文5では、誤りパターンとして多かったものは〔有声休止〕と〔無声休止〕であり、言葉を考えながら、迷うように表出するケースが多かった。そして、誤りパターンの表出があっても、元の文と意味的に違いがない復唱をした者が大半だった。すなわち、聴覚障害児は文章のインプットの面には課題が少ないが、アウトプットする際に時間がかかっており、言語処理に課題がある可能性が考えられる。

6. 結語

聴児ではその記憶力がSR成績に関わる一方、聴覚障害児では記憶力とSR成績には関係がみられなかった。SRの課題文の構造を複雑化することは、単純に記憶の面に負荷をかけただけでなく、聴取や言語処理の面にまで負荷を与えたことが予想された。また、聴覚障害児の聴力レベルがSR成績に必ずしも影響を与えとはいえないと示唆されたことから、SRが言語処理能力なども踏まえた聴取能力を測定できる新しい尺度となり得る可能性があるといえる。

誤りパターンの考察からは、会話内容の取り違えや会話のずれが生じたり、言語処理に時間を要したりするなどといった、聴覚障害児のコミュニケーション上の困難の一端を表す可能性も示唆された。

また、①SRを調査尺度として実施する際、最初の文章の誤りを安易に誤答とみなさない配慮が必要であること、②言語力の指標として、Reading-Testの読書力評定を用いることが妥当か検討の必要があること、③語連鎖における親密度なども考慮して課題文を作成する必要があること、といった改善点や課題も明らかとなった。

参考文献

- 1) 井脇貴子：人工内耳装用児の聴取能および言語発達の経過について、音声言語医学47, pp.298-305, 2006
- 2) 小磯花絵, 西川賢哉, 間淵洋子：第2章「転記テキスト」, 国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法, pp.23-132, 2006
- 3) 中島悦子：自然談話に現れるフィラー—自然談話録音資料に基づいて—, Asia Japan Journal 4, pp.1-23, 2009
- 4) 日本語記述文法研究会：現代日本語文法①, くろしお出版, 2010
- 5) 大伴潔：統語的スキルの評価法としての復唱課題の検討—一定型発達幼児と言語発達に遅れのある学齢児との比較を通して—, 東京学芸大学教育実践センター紀要 第7集, pp.109-117, 2011
- 6) 阪本一郎：新・教育基本語彙, 学芸図書, 1984
- 7) Sunada Midori: Sentence Repetition as a Measure of Learner's English Proficiency, 学校教育学研究論集 第29号, pp.41-59, 2014
- 8) 塚田晴代, 長井今日子, 小原沢昌子, 亀井民雄：学齢期の軽度, 軽中等度感音性難聴児における補聴器適合の検討, Audiology Japan 41, pp.214-220, 1998

難聴通級指導教室通級児の
聴覚活用及びコミュニケーションにおける困難の様相に関する調査

—— SR（復唱）課題による検討 ——

Aspects of Difficulties in Hearing Utilization and Communication of
Children Attending Class for the Hard of Hearing:

Based on the Results of Sentence Repetition Test

鈴木 友里恵^{*1}・濱田 豊彦^{*2}

Yurie SUZUKI and Toyohiko HAMADA

支援方法学分野

Abstract

Light and medium hearing-impaired children and cochlear implant children are said comparatively easy to use hearing. The purpose of this study is to make clear their degree of hearing utilization and their aspects of communication difficulties and to try devising a scale that measure the degree of hearing utilization and verifying the effect of the scale. In this study, we used a Sentence Repetition test (hereafter SR), and the subjects were 17 elementary students attending class for the hard of hearing children. We tried to complicate the sentence structures for testing. As a result, it is expected that to complicate the sentence structures is not only applying a load on the aspect of memory but also listening and language processing. Also, hearing-impaired children's hearing level does not necessarily affect the results of SR, so it seems that there is a possibility that SR can measure the listening ability based on the language processing ability and so on. It was also suggested from the error pattern of the repetition that it may represent part of the communication difficulties of hearing-impaired children such as misinterpretation of conversation content and disparity of conversation, and time consuming language processing. Furthermore, it is also necessary to consider the selection of the standardized test to be used as an index of the language ability, the problem such as it is necessary to prepare the sentences for testing in consideration of familiarity in the word chain, and so on.

Keywords: hearing-impairment, hearing utilization, Sentence Repetition

Department of Support Methods for Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究では、比較的聴覚活用がしやすいと考えられている軽中度難聴児や人工内耳装用児の聴覚活用

*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University (Master's Course)

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

の程度及びコミュニケーションにおける困難の様相を明らかにし、彼らの聴覚活用の程度を測る尺度を試案し、その効果を検証することを目的とした。難聴通級指導教室に通う17名の小学生を対象に、文構造の複雑化を図った課題文を用いたSR（復唱）課題を用いた調査を行った。その結果、SRの課題文を複雑化することは、記憶の面だけでなく、聴取や言語処理の面にまで負荷を与えたことが予想された。また、聴覚障害児の聴力レベルはSR成績に必ずしも影響を与えないと考えられたため、SRが言語処理能力なども踏まえた聴取能力を測定できる可能性があるといえる。復唱の誤りパターンからは、会話内容の取り違えや会話のずれが生じたり、言語処理に時間を要したりするなどといった聴覚障害児のコミュニケーション上の困難の一端を表す可能性も示唆された。さらに、言語力の指標に用いる標準検査の選択について検討する必要があること、語連鎖における親密度なども考慮して課題文を作成する必要があることなどの課題も明らかとなった。

キーワード: 聴覚障害, 聴覚活用, Sentence Repetition